

ローマ人への手紙第七五回質問

7…9 私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たとき、罪は生き、

7…10 私は死にました。それで、いのちに導くはずの戒めが、死に導くものであると分かりました。

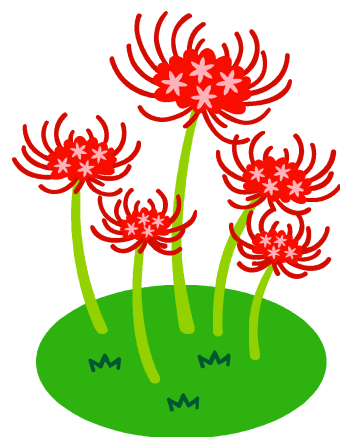
7…11 罪は戒めによって機会をとらえ、私を欺き、戒めによって私を殺したのです。

(ロマ七章九―一節／新改訳2017)

(問一) 10節で「いのちに導くはずの戒めが、死に導くものであると分かりました」とありますが、その意味を具体的に説明して下さい。

(問二) 11節で「罪は戒めによって機会をとらえ、私を欺いた」との意味を具体的に例を挙げて説明して下さい。





罪の欺き

(ロマ七章一〇―一一節)

多くの人々は、罪の恐ろしさがわかりません。罪について、罪の恐ろしさ、その実体がわかると、救いについてもよくわかるはずですし、喜びにあふれた信仰生活を送ることができると思います。

きょう学ぼうとしているこの箇所は、律法の性格や機能、および目的について語っている一連の文章の一部分です。きょうのこの箇所には、律法についてだけでなく、罪についてもしるしていますので。この箇所から主のみこころを教えられたいと思います。

パウロは、まずこう言っています。「いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わたしにはわかった」。パウロはここで「……わかった」と言っていますが、それは彼の研究の結果わかったというのではありません。律法との出会いによってわかったと言っています。

律法とは本来どのようなものであったのかと言いますと、

「いのちに導くはずのこの戒め」と言っておられますように、「いのちに導くはず」のものでした。律法が本来「いのちに導くはず」のものだと言いますと、驚く人がいるかもしれません。というのは、パウロはすでに次のようにしるしているからです。

「というのは、律法を行なうことによっては、どんな人も神の前に義とはされないからである。それは、律法によって、罪をほんとうによく知ることができただからである。」⁽¹⁾

しかし、この点は非常に重要なので、聖書全体から学ぶ必要がありました。パウロは、この手紙の少しあとの所で、次のようにしるしています。

「それは、モーセが『律法の義を行なう人は、その義によつて生きる』と書いているとおりでである。」⁽²⁾

確かに聖書は、人間が律法を完全に守るなら、神に喜ばれる聖くて幸福な生活をする事ができると教えています。

「私たちの神、主が命じられたように、御前でこのすべて⁽³⁾の命令を守り行なうことは、私たちの義となるのである。」
ある時、主イエス・キリストのところに来て、主を試みようとした律法学者が、「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか」と言ってお尋ねた時、主は「律法には、何と書いてありますか。あなたはどうか読んでいますか」と答えられました。すると、律法学者はその問いに答えて、「『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』ま

た「自分と同じように、あなたの隣人を愛せよ」とあります」と言った時、主は「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます」と答えておられます。⁽⁴⁾けれども、このように本来、それを守ることによっていのちをあたえるはずの律法が、そうでなくなってしまうのです。それは、人間が罪に陥ったからです。そこで聖書が次のように語っているところに注目したいと思います。

「もしもいのちを与える律法が与えられていたとすれば、義はたしかに律法に基づくものであったはずだからである。しかし聖書は、すべての人を罪の下に閉じこめてしまった。それは、イエス・キリストを信じる信仰による約束が信じる者たちに与えられるためなのである。」⁽⁵⁾

このように、律法は本来、それを守る人にいのちの充足を与え、その人を神の御前に義とし、幸福にするはずのものでした。しかし、人間が罪に陥ることによって、その時から一変してしまったのです。「いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わたしにはわかった。」このことについて、パウロはもう少し説明的に次のようにしるしています。

「しかし、義の律法を追い求めていたイスラエルは、その律法に達しなかった。なぜだろうか。信仰によって追い求めないで、行ないによって得られるかのように追い求めたからである。彼らはずまずきの石につまずいたのである。」⁽⁶⁾ここにおいて、パウロが三章二〇節で述べたことの意味がよくわかれると思います。そこでは、パウロは罪に陥った人は、

「律法を行なうことによっては、どんな人も神の前に義とはされない」と言っており、さらに、「律法によって、罪をほんとうによく知ることができると付け加えているわけです。

一一節では一〇節の説明がなされています。「というのは、罪は戒めを利用して、わたしを欺き、戒めによってわたしを殺したからである。」これは、八節の繰り返しのように見えます。八節では次のようにしているからです。「しかし罪は、戒めを利用して、わたしのうちにありとあらゆるむさぼりを生み出した。というのは、律法がなければ、罪は死んだものだからである。」しかし、単なる繰り返しではありません、その点について考えてみましょう。

ここで「罪は……わたしを欺き」と言っている点に注意したいと思います。最初の人が罪を犯した時、主がエバに「あなたは、いったいなんということをしたのか」と問われた時、エバは次のように答えています。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです。」このことについては、パウロも言及しています。

「しかし、蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはと、私は心配しています。」つまり、罪がわたしたちを欺くとは、蛇に身をやつして誘惑してきた悪魔が欺くことにほかなりません。しかし、また次のような言及もあります。

「すなわち、あなたがたは以前の生活について言うならば、人を欺く欲情に従って滅び行く古い人を脱ぎ捨てるべきこ

と……。」⁽¹⁰⁾

これは、罪が人間の情欲を使つて、人を欺くことを意味しているでしょう。

また、次のように教えられている所もあります。

「だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」⁽¹¹⁾

以上、多くの個所から引用しましたが、これらはいずれも、罪がいかに力強いものであるかということだけでなく、人を欺き惑わすものであるかということをお教えしています。人を間違つたところに導いていくのです。

「罪は戒めを利用して、わたしを欺き、戒めによつてわたしを殺した」とパウロは語っておりますので、罪がどのような戒めを利用して、わたしたちを欺くものであるかということについて、次に考えてみましょう。まず第一に、罪はわたしたちに戒めを誤つて使うようにさせます。それは、一つには自分の力で戒めを守り、神の御前に義たりうると考えさせます。クリスチャンでないまじめな人は、みなそう考えています。それは、罪にだまされているのです。パウロがクリスチャンになる前、彼は「律法(12)による義については、非難されるところのない者であつた」と言っているのは、まさにそうした考え方で生きていたということにほかなりません。しかし、彼は決してそれで神の御前に義となつていたものではありません。罪によつて欺かれていたにすぎないのです。

第二に、わたしたちは罪に陥ると、わたしたちの良心は呵責のために、もっとひどくなつていき、絶望状態になつて、

これ以上悪くはならないだろうと考えるようになります。こうして、何度でも罪を重ねていくようになります。

また、罪は別の仕方戒めを利用して、わたしたちを欺きます。それは律法廃棄主義という恐るべき考え方を起こさせることによつてです。たとい律法を破つて罪を犯しても、決して恐れることはない。「罪の増し加わつたところには、恵みもますます満ちあふれた」⁽¹³⁾のだからと言うのです。

また、罪はさらに別の仕方戒めに対する反抗をわたしたちの心に起こさせることによつて、わたしたちを欺きます。最初の女エバが悪魔から「……ならない、と神はほんとうに言われたのですか」⁽¹⁴⁾と質問された時、悪魔の問いには、神はあなたにある禁止事項を設けられた。神はあなたの前にその禁止事項をもつて立ちはおられるのだという印象をエバに与えることによつて、エバの心の中に、神の戒めに対する反抗を生み出そうとしました。

そして、罪はそれ自身、魅力的であるかのような様相をもつて、わたしたちを欺きます。エバがその木を見ると、「その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くする」というその木はいかにも好ましかつた⁽¹⁵⁾のです。もし罪にこのような魅力がなかったら、いったいだれがそれにひかれていくでしょうか。聖書は、教えています。

「サタンさえ光の御使いに変装するのです。」⁽¹⁶⁾そして、わたしたちの心を惑わし、「知性は暗く」⁽¹⁷⁾という有様にしてしまいます。ですから、わたしたちは罪の恐ろしさについて、よく知らなければなりません。罪の恐ろしさを知らない人は、

罪のために、死に至る道を歩いて行ってしまわなければなりません。そして、この罪と死からの救いこそ、イエス・キリストの十字架上の身代わりの贖いにはかなりません。

注(1)ローマ教会への手紙三章二〇節。

- (2) 同書一〇章五節。
- (3) 申命記六章二五節 新改訳。
- (4) ルカによる福音書一〇章二五―二八節 新改訳。
- (5) ガラテヤの諸教会への手紙三章二一―二二節。
- (6) ローマ教会への手紙九章三一―三二節。
- (7) 「欺き」(七・一一)と訳されたことばは、原語のギリシャ語では、エクセーパテーセン(ἐξηπάτησεν <ἐξαπατάω>)ということばが使われています。これは、非常に強い意味で、「完全にだます」という意味です。
- (8) 創世記三章一三節 新改訳。
- (9) コリント教会への第二の手紙一章三節 新改訳。
- (10) エペソ教会への手紙四章二二節。
- (11) ヘブル人への手紙三章一三節 新改訳。
- (12) ピリピ教会への手紙三章六節。
- (13) ローマ教会への手紙五章二〇節。
- (14) 創世記三章一節 新改訳。
- (15) 同書三章六節 新改訳。
- (16) コリント教会への第二の手紙一章一四節 新改訳。
- (17) エペソ教会への手紙四章一八節。